

翁久允賞推薦文 祝創業百年富山県人社

太田久夫

今年は昭和百年ということである。昭和の御代^{みよ}は、初めと終わりが一週間という稀有な年号であった。

大正十三年十一月三日、陸軍特別大演習が行われ、西砺波郡埴生村（現在の小矢部市埴生地区）には御野立所^{おのだてしょ}が設けられ摂政官裕仁親王^{せつしょうのみや}（後の昭和天皇）が統監に当たられた。雪に輝く立山連峰^{まぶた}を目蓋に焼き付けられたことであろう。大正十四年一月二十日の歌会始に、「山色連天^{さんしよく}（山色天に連なる）」の勅題で「立山の空^{そび}に聳ゆるををしさにならへとぞ思ふみよのすがたも」と詠まれた。あたかも富山県民の歌のように、親しく富山県民に唄われた。この御製碑^{ぎよせいひ}が、令和七年十一月三日小矢部市に建立された。

『富山県人』誌は、大正十五年四月『富山県及県人』として創刊された。出版事業として百年を迎えたことになる。発刊の趣意は「人の至情である愛郷心の上に立脚して、内に充実すると共に、人より人に、国より国に、世界の極にまで延び拓がる越中魂を発揮する紹介機関たる本領を発揮したい」であり、今日もこのモットーは変わらないと言えよう。海外で活躍する本県出身者を訪ねた記事もあれば、県外に出て、地元に残って活躍している人々の情報で満載である。これらの方々の活躍の分野は、政治・経済・教育・産業・衛生・青年会・婦人会などと、全く多岐にわたっている。

終戦直前には、国の雑誌用紙の割当制限のため、高志人社と一緒に『高志』を共同発行した時期もあったが、昭和二十一年に復刊し、県内外の情報を載せているので、今後ますます発展することと確信している。

添付 「富山県人雑誌」発刊の趣意

「富山縣人雜誌」發刊の趣意

○立山連峰の雄大なる、際涯もなき平野を潤はす四大川の活潑なる、われらは他の府縣をまわりみて、はじめて鳩巢先生が「越中百里山河壯」なるかなと、禮讃したる言の、ほんたうによく越中の地勢を概括的に表現してゐることを知る。

○そして幾千百年の永い歴史は、この郷土を乳房とし搖籃として育ちたる、われらの祖先の、いかにこの郷土を開拓し、いかにこれを愛護して、絶へず苦心努力したかを物語る。われらは祖先の築きあげたる郷土文化の土臺を破壊せず、しかも舊慣にこだわらずして、これを改善し、これを完成し、祖先の精神を現實に活かすことが、われらのいそむべき道であり、達すべき理想であると信ずる。蓋し愛郷の心は、人の自然の情にして、郷土の懐かしみは、異郷にあつて、一しは痛切に堪へがたく感ずる。この情は忘れようとして忘るゝことのできぬ深き因縁の連鎖であり、人の作爲でなくして、天の攝理である。○われらは人の勢力の世界的に伸び擴がることの痛快をおもふものなれども、近代の傾向として、漫に郷土を離れて、都會に集中する慌しさを悲しむ。郷里に踏みとどまつて、地方文化の開發に、終生渾身の努力を献げる人材の多くあらねばならぬ必要と、またさうした心懸の美はしさと、さうした生活のいかに自然であり幸福であることを、たしかに信ずる。

○われらは、脚一步郷里をふみださずとも、大なる天地の心、世界的の精神を抱くことの能ることを信するけれども、愛郷の精神の全く缺けたる愛國心や、または世界人類愛といふものの存在を疑はずにあらぬ。

○されど、われらは外に向つてはち切れさうに充實せる發展力を内に抱きながら、いかなる事情の下においても、郷土にのみ踞せねばならぬ理をもまた見出すことはできぬ。特に人口過剰の實情は、西に東に南に北に、何處でもいくら餘地あるところを見つけて、すん／＼發展せねばならぬやうに餘儀なくする。

世界を腹にかけてゐるものは、いつも郷里の懐かしみを忘れず、祖先の魂を愛護して、己が精神生活の興味と温味を失はぬやうに心懸けねばならぬ。郷里にのみありて、世間を知らぬ生活の貧弱さと、旅路にありて故郷との連絡なき生活の寂寞さとは、共に人として價值ある生活を欲するもの、堪へがたいところである。

○「富山縣人雜誌」は、人の至情である愛郷心の上に立脚して、内に充實すると共に、人より人に、國より國に、世界の極にまで延び擴がる越中魂を發揮する紹介機關たるを本領としたい。郷土にある縣人と、諸方に散ばつてゐる縣人との間の連絡機關たる使命を果したい。そして旅にある縣人に、故郷の状況如何を知らしめると共に、また諸國に散在して奮闘努力する縣人の消息を、故郷に知らしめることの、いかに有益にして、またいかに興味の多いことであるかを、痛切に感ずるものである。

○「富山縣人雜誌」にして、相當に發達して、その使命を盡すを得るならば、北海道樺太にある縣人も、沖縄臺灣にある縣人も、朝鮮、滿洲、支那、南洋、布哇、北南米にある縣人も、みな一處に一の俱樂部に、毎月集會するやうな愉快な心持を泌々味ひ得られることであらう。

○「富山縣人雜誌」にして叙上の如き希望と抱負をもつて立つ上は、郡市の地域に偏せず、政黨政派に拘らず、もちろん宗教宗派に囚はれず、最も公平に最も嚴正なる態度を持たねばならぬことを確信する。そして記事の内容は、縣の政治、教育、産業、交通、衛生、警察、社會事業のすべてに亘るのみならず、市町村の自治の状況、銀行、會社、産業組合、社寺、青年會、婦人會、在郷軍人會、消防組その他各種の團體事業の状況を報道したい。尙また諸國各處に散在する縣人の活躍奮闘ぶりを報道するを怠らぬは勿論である。

○唯だ「富山縣人雜誌」の誓つて避けることは、縣人間の平和を傷けること、人を惡口罵詈するところである。堅く戒むところは、惡宣傳を事とし、抗爭を好む徒を相手にせぬことである。

○終りに、尙事情許すならば、縣より上京する學生寄宿のためと、その他一般縣人宿泊のために、一の修養館を建設せんことは、われらの宿願である。さればわれらの爲すべき事業の範圍頗る大にして、その任務の極めて重大なるを思はずに居られぬ。願はくばどうぞ、同縣人の諸君におかれて、奮つて本社

の趣意を賛成し、その目的を達成せしむるやう御援助を與へられんことを。